



# なんでもねん

発行責任者 倉橋 忠



No.50

## 『方丈記』から読み取ろう

### 源平の戦いが、飢饉を拡大し、民衆を餓死に追い込んだ

「平氏にあらずんば人にあらず」と、絶大な権力と勢力を誇った平氏も、源氏に敗れ去った。その背景にあったものは、洪水・旱魃<sup>かんぱつ</sup>などの自然災害と人災であった。

源頼朝が伊豆で挙兵した、1180(治承4)年の夏の西日本は、旱魃による不作に襲われた。にもかかわらず、平清盛は源氏との戦いに備えて西日本各地から兵糧米<sup>ひょうろうまい</sup>を集めようとした。兵糧米は集まらなかった。伊勢を拠点にしていた清盛は、それまで伊勢神宮の所領には年貢を免除していた。しかしこの時には、清盛は伊勢神宮の所領にも兵糧米を出すよう命じた<sup>3</sup>。それほど平氏は食糧危機に陥っていたのである。

平氏軍の様子は、治承4年の富士川の戦いに象徴的に現れた。夜半、密かに武田信義(源氏)が平氏軍の背後に迫った時に水鳥が飛び立った。水鳥の羽音を源氏の攻撃と勘違いした平氏軍は戦わずに京都に逃げ帰った<sup>4</sup>。平氏の退却には事情があった。源氏軍は2万騎、平氏軍は4,000騎でもともと劣勢だった。さらに、寄せ集めの軍で士気が低く、食糧不足で脱走者が相次ぎ、最後には2,000騎に減っていたのである。

そして、翌年の1181(養和元)年にも、旱魃が続き西日本は飢饉におそわれた。特に京都の飢饉はすさまじかった。源頼朝が、京都に送られる東国の物資を都の外でおさえ、あわせて木曾義仲が北陸地方を支配し京都への物流を止めたからである。絶大な権力を誇った、平清盛はその年の閏2月に病死した。清盛は64歳であった。

源平の戦いは、東国の豊作、西国の飢饉という食糧事情が命運を分けたと考えられている。けれども、兵糧米の徴収や、戦略的な物流の停止により、旱魃の被害が拡大され、京都や西日本の民衆がより大きな被害を受けたことを忘れてはならない。

当時の京都の様子を、約30年後に鴨長明が『方丈記』で生々しく回想している。『方丈記』が伝える、戦争の悲惨さや「末法思想」及び「無常観」を読み取ろう。なお、『方丈記』は『徒然草』や『枕草子』と合わせて日本三大随筆とよばれる。

\*1 かんぱつ「古くはカンパチとも。「魃」は、ひでりの神) 長い間雨が降らず、水が溜(か)れること。ひでり。特に、農業に水の必要な夏季のひでりにいう。」広辞苑第七版。

\*2 ひょうろう「戦時における将兵の食糧のこと」広辞苑第七版。

\*3 『吾妻鏡』治承5年(1181年)正月21日。五味文彦・本郷和人『現代語訳 吾妻鏡』<sup>1</sup> 頼朝の挙兵』吉川弘文館 2007年 p.67。『吾妻鏡』は鎌倉幕府の前半を記録した歴史書。

\*4 前掲、五味文彦・本郷和人『現代語訳 吾妻鏡』頼朝の挙兵』pp.47-48。

## 方丈記

鴨長明

一 行く河の流れは絶えずして

人と栖との無常

行く河の流れは絶えずして、しかも、もとの水にあらず。よどみに浮ぶうたかたは、かつ消え、かつ結びて、久しくとどまりたる例なし。

世の中にある人と栖と、またかくの如し。

玉敷の都のうちに、棟を並べ、甍を争へる、高き・賤しき人の住ひは、世々を経て尽きせぬものなれど、これをまことかと尋ねれば、昔ありし家は稀なり。或は、去年焼けて、今年造れり。或は、大家亡びて、小家となる。

住む人もこれに同じ。所も変わらず、人も多かれど、いにしへ見し人は、二、三十人が中に、わづかに一人・二人なり。朝に死に、夕に生るる習ひ、(ただ)、水の泡にぞ似たりける。

知らず、生れ・死ぬる人、何方より来りて、何方へか去る。また知らず、仮の宿り、誰が為にか、心を悩まし、何によりてか、目を悦ばしむるその主と栖と無常を争ふさま、言はば、朝顔の露に異ならず。或は、露落ちて、花残れり。残るといへども、朝日に枯れぬ。或は、花しほみて、露なほ消えず。消えずといへども、夕を待つことなし。

(中略)

## 【現代語訳】

## 方丈記

鴨長明

「一」 行く河の流れは絶えずして

人と栖との無常

河は涸れることなく、いつも流れている。そのくせ、水はもとの水ではない。よどんだ所に浮かぶ水の泡も、あちらで消えたかと思うと、こちらにできていたりして、けっしていつまでもそのままではない。

世の中に存在する人と住居とは、やはり同じようで、このようなものだ。

壮麗な京の町に競い建っている貴賤の住居は、永久になくならないものよりうだけれども、ほんとにそうかと一軒一軒あたってみると、昔からある家というのは稀だ。去年焼けて今年建てたのもあれば、大きな家が没落して小さくなったものもある。

住んでいる人にしても、同じこと。所は同じ京であり、人は相変わらず大勢だが、昔会ったことがある人は、二、三十人のうち、わずかに一人か二人になっっている。朝死ぬ人があるかと思えば、夕方生まれる子がある。まさによどみに浮かぶうたかたとそっくりだ。

ああ、私は知らぬ、こうして生まれたり死んだりする人がどこからきて、どこへ消えてゆくのか、を。また、いったい、仮の宿であるこの世で、誰のためにあくせくし、どういう因縁で豪華な生活にとられるのか。そうしてあくせくした人も、その建てた豪華な邸宅も、先を争うようにして変わってゆく、消えてゆく。いつてみれば、朝顔とその露に同じだ。露が先に落ちて花が残る。残って咲いているといううちに、日が高くなって枯れてしまった。花が先にしておれて露が消えずにいることもある。消えずにいるといっても、夕方までもつわけではない。

(中略)

\*5 原文と現代語訳については、次の3冊を利用した。①神田・永積・安良岡編訳『方丈記・徒然草・正法眼蔵随聞記・歎異抄』小学館 1995年 ②永井路子『永井路子の方丈記・徒然草』集英社文庫 1996年 ③安良岡康作『方丈記 全訳注』講談社学術文庫 1980年

## 五 また、養和のころとか、久しくなりて

## 養和の飢饉

また、養和のころとか、久しくなりて、（確かにとも）  
 覚え、二年が間、世の中飢渴して、あさましき事待り  
 き。或は、春・夏、日照り、或は、秋・（冬）、大風・  
 洪水など、よからぬ事どもうち続き、五穀ことごとく  
 成らず。（空しく、春かへし、）夏植うる営みのみあり  
 て、秋刈り、冬収むるそめきはなし。

これによりて、国々の民、或は、地を捨てて、境を出  
 て、或は、家を忘れて、山に棲む。さまたまの御祈り始  
 まりて、なべてならぬ法ども行はるれど、さらに、その  
 しるしなし。京の習ひ、何わざにつけても、源は田舎  
 をこそ頼めるに、絶えて、上る物なければ、さのみやは、  
 操も作りあへん。念じわびつつ、さまたまの財物、か  
 たはしより捨つるが如くすれども、さらに、目見立つる  
 人なし。たまたま換ふる者は、金を軽くし、粟を重くす  
 乞食、道のほとりに多く、愁へ悲しむ声、耳に満てり。  
 前の年、かくの如く、辛うじて暮れぬ。明くる年は立  
 ち直るべきかと思ふほどに、あまりさへ、疫癘うち添ひ  
 て、まさ様に、跡かたなし。

世の人、皆けいしめれば、日を経つつ窮まりゆく様、  
 少水の魚の譬に叶へり。果てには、笠うち着、足ひき包  
 み、よろしき姿したる者、ひたすらに、家ごとに乞ひ歩  
 く。かくわびしれたる者どもの、歩くかと思れば、即ち  
 倒れ伏しぬ。築地のつら、道のほとりに、飢死ぬる者  
 の類、数も知らず。取り捨つるわざも知らねば、臭き香、  
 世界に満ち満ちて、変りゆくかたち・有様、目も当てら  
 れぬ事多かり。

## 【現代語訳】

## 「五」 また、養和のころとか、久しくなりて

## ——養和の飢饉——

また、養和年間のことだったか、もう年の記憶もはっきりしないが、二年間というも  
 の、飢饉で、ひどいことがあった。春・夏、雨が降らなかつたり、秋、台風・水害など、  
 運の悪いことが続いて、農作物がみんなだめになり、夏の田植えの行事だけがあつて、  
 秋・冬のとり入れのにぎわいはない。

そのため、諸国の農民で、土地を捨てて国ざかいを出る者や、家を捨てて山に入つて  
 しまふ者が出てきた。朝廷では、いろいろな御祈禱がはじまつて、尋常一様でない特  
 別な御修法が種々なされたけれども、いつこうにそのききめがない。京という所は、  
 とにかく何をするにも、先だつものは田舎から米が来ることであつて、それを命の綱に  
 しているのに、それがぜんぜん来なくなつたのだから、いつまで世間体ばかりつくろつ  
 ていられようか。早く立ち直ればいいがと心の中では願いつつも、どうにもならないま  
 まに、いろいろな家財を片端から捨てるように安く売つて食料に代えてゆくのだが、  
 これはたいした物だと掘り出してくれる人もいない。第一、振り向いても見えない。とき  
 たま換えてもらつても、金目のものが金目にならず、食料のほうが高くつく。乞食が道  
 ばたに多くなり、どこへ行つても不平と嘆息の聲ばかり。

第一年は、こんな調子で、やつと過ぎた。翌年は何とかなるかと思つてみると、反対  
 で、そのうえに伝染病まで加わつて、いいほうに向かう様子はちつとも見えない。

世間の人みんなが巻きこまれて困つてゐるのだから、どこに助けを求めようもなく、  
 一日一日と窮迫していく状況は、わずかにしかない水に苦しむ魚のたとえによくあて  
 はまつてゐる。しまいに、笠をかぶり、足をくるんで、かなりの身分らしいかつこう  
 の者が、ただただ、ひもじさに一軒一軒食を乞うて回るようになった。こんなに落ち  
 ぶれて、どうしていいかわからなくなつた者たちが、歩いてゐたかと思つと、ぱたと倒  
 れて、もう死んでゐる。土塀のそばや、道ばたに、そういう餓死者が無数にあつた。そ  
 の死骸を取り除く手段も分らないので、死体から出る死臭が都に広がり、腐爛して  
 変わり果てていく死体の容貌や姿は、あまりにひどくて見ていられないことが多かった。

【原文】

いはんや、河原などには、馬・車の行き交ふ道だになし。あやしき賤・山がつも力尽きて、薪さへ乏しくなりゆけば、頼む方なき人は、自らが家を壊ちて、市に出てて売る。一人が持ち出てたる価、一日が命に及ばずとぞ。

あやしき事は、薪の中に、赤き丹つき、箔など所々に見ゆる木、相交はりけるを、尋ねれば、すべき方なき者、古寺に至りて、仏を盗み、堂の物の具を破り取りて、割り砕けるなりけり。濁・悪の世にしも生れ合ひて、かかる、心憂きわざをなん見侍りし。

(また、)いとあはれなる事も侍りき。去り難き妻・夫持ちたる者は、その思ひまさりて深き者、必ず、先立ちて死ぬ。その故は、わが身は次にして、人をいたはしく思ふ間に、まれまれ得たる食ひ物をも、彼に譲るによりてなり。されば、親子ある者は、定まれる事にて、親ぞ先立ちける。また、母の命尽きたるを知らずして、いとけなき子の、なほ、乳を吸ひつつ臥せるなどもありけり。

仁和寺に隆・曉法印といふ人、かくしつ、数も知らず死ぬる事を悲しみて、その首の見ゆるごとに、額に阿字を書き、縁を結ばしむるわざをなんせられける。人数を知らんとて、四・五兩月を数へたりければ、京の内、一条よりは南、九条より(は)北、京極よりは西、朱雀よりは東の、道のほとりなる頭、すべて、四万二千三百余りなんありける。いはんや、その前後に死ぬる者多く、また、河原・白河・西の京、もろもろの辺地などを加へて言はば、際限もあるべからず。いかにいはんや、七道諸国をや。

崇徳院の御位の時、長承のころとか、かかる例ありけりと聞けど、その世の有様は知らず。目のあたり、めづらかなりし事なり。(後略)

【現代語訳】

町の内さへこんな様子であるから、賀茂の河原なんかでは、死体が多く捨てられて、馬や車も通れないほどだ。卑賤な者、木こりたちも、力が尽きて、薪も持たなくなつたから、あてのない人たちは、自分の家をこわして、薪にして市で売つた。一人が持つて出た薪の値段が一日分の食料にもならなかつたという。

けしからんことには、薪の中に赤い丹や箔などのついた木がまじつてゐるので、聞いてみると、どうにもしようがなくなつた者たちが、古寺に行つて仏像を盗み、お堂の仏具をこわして、それを薪に割つたのだつた。こういう末世の、悪い時代に生まれあわせて、こんないやなことまで見なければならなかつた。

しかしまた、たいそう哀れなこともあつた。別れられない妻や夫をもつた者は、愛情のより深い者のほうがきつと先に死ぬ。というのは、自分のことは二の次にして、相手がかわいそうだと思うために、たまに手に入れた食物を相手に先に食べさせるからである。だから、親子でいっしょにゐるものは、きまつて、親が先に死んだ。また、母の息が絶えてゐるのも知らずに乳のみ児が乳房にとりついてゐるようなこともあつた。

仁和寺の隆・曉法印という人が、こうして無数の餓死者が出ることを悲しみ、行きあうごとに、死者の額に「阿」の字を書いて、阿字本不生の仏縁に結んでやろうとされた。その人数を知らうとして、四月と五月、数えたところ、京の一条から九条まで、東京極から朱雀大路まで、つまり平安京の東半分の死体が、計四万二千三百余体あつた。いうまでもなく、三月以前、六月以後に死んだ者も多いし、賀茂川の河原、その東の白河、あるいは朱雀から西の京、その他、方々の郊外まで加算したら、きりがないうちがいない。まして、畿外の諸国まで加えたら、どういふことになるうか。

崇徳天皇御在位の、長承年間とかに、やはり、こういう飢饉があつたそうだが、当時のことは知らず、この目で見た養和の飢饉だけはたしかに、こんなこともあるかと思うようなものだった。(後略)